

《 今年度の学校運営の反省と次年度の方針 》 大山 浩司 校長

○近況報告として、1月伝統となっている凧作りと凧揚げを行った。昨年度から3年生から6年生まで中凧作りを行い、6年生になると自分で作れることを目標としている。多くの方に協力をいただいた。持続可能な形で行事をすすめていけたらよいと考えている。地域の方々から協力していただくことはいただき、学校として地域に貢献できることは行いながら双方向の関係を大切にしながら、東郷小学校は「地域とともにある学校」を共有していきたい。現在は、6年生を送る会について話し合い、5年生を中心に、子どもたちで準備を進めている。

○学校評価アンケートの結果から、多くの項目で90%を超える評価をいただいた。少数になる意見も大切に今後も学校運営にあたっていきたい。

児童、保護者共によくなっている項目として、「家族や地域の人にあいさつをしている」の項目があげられる。毎朝、校門に立つが元気のよいあいさつが聞こえてくる。また、来客の方からもあいさつのよさを褒めていただいている。子どもたちにも褒めていただいたことを伝えながらよりあいさつのよい学校を目指したい。課題とあげたい項目として、「楽しく学校に通うことができましたか」が昨年より下降傾向にある。子どもたちは、アンケートを取った時に楽しいことがあったとか友達と遊んで楽しかったということで数値は変化することがある。「自分が何かできるようになって楽しい」など、「楽しい」の質が上がるように教育活動の充実を目指していきたい。また、友達や他学年のとの関わりの中で思いやりの心が育つようにしたいし、思いやりのある行動を積極的に称賛するようにして意識を高めていきたい。

『「思い描く学校を共に創り上げる子」の学校教育目標を達成するため、進んで授業づくり・学校づくりに取り組みましたか』の項目が同じく下降傾向を示している。学校教育目標3年目になり、意識が低くなっていることが考えられる。目標の難しさもあり、今の学校目標の思いを大切にしながら、若干の変更を加え、みんなが共有しながら取り組めるわかりやすいものにしていきたい。

○年間計画について、東郷小として大切にしている相撲大会、東郷祭、凧揚げ等はこれまで通り計画している。7月上旬に修学旅行、10月に自然教室を配置している。また、11月に「ファミリー参観日」を設定した。これまで祖父母参観があったが家族で参観できるようにした。時間的にも休み時間を入れた2時間程度と考えている。地域の子ども会をこれまで学校で行っていたが、課題や成果があっても地域の方に伝わらなかった。来年度は、地域で行う形をとっていききたい。夏休み前の地区懇談会も地区主導で職員の派遣は行わない。PTAのサポーター制度についてもSNSを駆使しながらより参加しやすい形にしていきたい。

《 今年度の学校運営の反省と次年度の方針についての質問や意見 》 各委員から

- ・学校でも地域のなかでも子どもが育っていることを知って安心している。
- ・授業参観にも何度か行くことができ、楽しく授業に臨む子どもたちの姿を見ながら、今の学校は変わったなと思えた。小学生が家や近所にいないため関わりが薄かった。自分のなかでは待つのではなく積極的に子どもたちに声をかけて関わりをもつようになってきた。スクールバスの見守りを行ったが、子どもたちや親からもあいさつがかけられるようになった。また、自分自身も新たな地域の発見につながった。残念なことは、今の保護者の方が地域の事業を簡素化する傾向にあること、地域の人材活用を面倒なことと考えていることがあげられる。
- ・学校目標の変更について考えていると説明があり、校長先生の考えを聞くことができた。簡潔で分かりやすくなるのでありがたいと感じた。
- ・凧揚げで、子どもが「今年一番高く上がった」と喜んでいて。年を重ねるたびに凧作りも上手

くなる。来年度、「ファミリー参観日」を計画していると説明があったが楽しそうだ。

- 持続可能な形での伝統的行事にしていることがありがたい。家庭の中で、1年生の子が6年生の子の名前を言える。6年生の子が1年生の子の名前を言える。これは、学校の雰囲気を感じさせ、共に学校を創っていることがわかる。外ではあいさつがよいようだが、家でもっとあいさつできる子になってほしい。
- 学校教育目標への子どもの意識が3年たって下降していることがアンケート結果から読み取れるということで、意識を高めるための変更をしようとしている努力がありがたい。子どもたち同士での受け継ぎ方にも変化がでるだろう。同じくPTAの活動でも引き継ぎ方を検討したいと思った。
- 学校アンケートでは、親の結果と子どもの結果に差が生じている項目について対策を考えていくことが大切。
- ふるさと学習で思うことなのだが、普段見られない視点から町を見ることも大切。例えば、町の事業でカヌーの発着所を設置しているが活用はほとんど見かけない。助川から成田まで赤川から三川町を見ることで新たな発見をすることができる。それが、自然や文化を大切にすることにつながる。
- マインクラフトの仮想空間のなかにバーチャルの学校をつくった子がいた。ドローンなどを活用し、上空から三川町を見ながらメタバースで地域を描くことも大切な取り組みである。
- パルク赤川の芋煮会ができる施設を各学校で利用するようなことがあってもよい。もっと活用の仕方を考え、他の地域の人に発信することは、町の子どもたちにとってもよい経験となる。
- ふるさとに思いを寄せる子どもを育成するためには、小さいときに町内会などで楽しい思い出をつくってあげることは大切である。今の時代、大人が忙しくなるので削減してきた町内会や町の事業が多くなってきている。
- 学校の防災対策について、今後、地域と連動しながら考えていけないだろうか。学校の備蓄についても考えていきたい。
- 子ども引き渡しの判断は、災害の状況や情報をしっかり確認をして行うことが大切。情報がなければ、学校にとどめおく判断もあり。
- 避難訓練より子どもたちには災害対応についての経験をさせたい。電気がつかない、水も出ない状況の中でどのように生活していくかが災害対応であり、経験していると実際の災害時に力になる。
- 補食の備蓄場所は学校にある。職員室の天井も屋根裏部屋になっている。地域の災害対応について知りたい。